

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二七八）

文・出水 康生

戦国おもしろ百話

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮

阿波岩倉・和泉岸和田・近江水口・駿河駿府・伯耆米子への変転（八）

織田氏から豊臣氏へ

元亀元（一五七〇）年から十年來の石山合戦が正親町天皇勅諭によって織田信長と本願寺法主顯如との和睦が天正八（一五八〇）年三月に成立し、四月に顯如は大坂石山本願寺から紀州鷲森（和歌山市）へ雑賀衆の船で出迎えられて移る。

この時に和睦に反対した教如の行動によって本願寺と寺内町が全焼する。そしてその跡地に天正十一年八月



雑賀五郷の所在

から秀吉が大坂城の築城を開始する。その前の七月四日に秀吉は顯如を鷲森から貝塚（貝塚市）へ移住させ、貝塚御坊とする。

信長は本願寺による包囲の圧力が無くなり中国攻めを加速させ、三木城の別所氏、鳥取城を「干殺し、飢え殺し」で陥落させ、備中高松城を「水攻め」で清水宗治を切腹させる。

天正十（一五八二）年六月二日の本能寺の変で、信長から秀吉へと“天下”が動く。“大返し”で十日後に山崎合戦で明智光秀、賤ヶ岳合戦（一五八三）で柴田勝家を敵対者として撃破し、小牧・長久手合戦（一五八四）で織田信雄、徳川家康の連合勢と戦い、持久戦の末に和睦して秀吉が豊臣氏を名乗って“天下人”となる。

本能寺の変が起こらなけ

れば六月三日には三好康長の養子となっていた織田信孝を大将、丹羽長秀を参謀とした四国平定軍が岸和田から渡海して長宗我部勢を攻伐して、阿波国主に三好康長、讃岐国主に三好（織田）信孝が配置されていたであろう、とされる。それが破綻して先兵として織田勢を率いて阿波に帰国して失地回復していた三好康長が即刻に畿内・高屋城に退陣する。

本能寺の変に快哉の声を上げた長宗我部元親が土佐勢の総力を結集して天正一〇年八月二十八日（九月二十一日）の中富川合戦で三好（十河）存保勢を讃岐虎丸城（東かがわ市）へ駆逐し、それ以後の天正十三（一五八五）年四月までの「四国制覇」を達成する。

最近の新資料による研究によって本能寺の変の原因

が信長が元親に与えていた「四国は切り取り次第」との朱印、それが明智光秀を元親への取次ぎとする路線から「天下」の状況変化で秀吉を取り次ぎとして秀吉・三好康長への路線変更によって「四国国分け」が実行され、三男の信孝を“三好の名”で讃岐国主に配置することを考えた、とされる。

本能寺の変によって信長から秀吉への“天下人”の移行により、三好康長と叔父・甥の関係であった横田村詮の運命が大きく変わる。三好康長を仲介として中村一氏と横田村詮が出会って波乱万丈の人生を生きる。その舞台が和泉岸和田であった。信長・秀吉の紀州平定が進められる過程で、根来衆・雑賀衆を抑える前線基地が岸和田で、そこに配置されたのが中村一氏であった。

岸和田での中村一氏

紀伊国には熊野権現社・高野山金剛峯寺・根来寺・粉河寺の杜寺が戦国期にも勢力を持ち、それに向衆の「雑賀惣国」が存在し、畠山氏の守護支配を弱体なものとしていた。大和では古都平城の興福寺が守護に

代わる存在としての支配権を持ったように、紀伊でもそれらの寺社勢力が独自の支配権を形成していた。三好氏の時代にはそれらの勢力との厳しい対立はなかったが、それでも永禄五（一五六二）年三月五日の久米田合戦で畠山勢に加わった根来衆の鉄砲で三好実休が討死にしたように、岸和田が対立の前線となっていた。信長の「天下布武」の旗幟の下では、比叡山延暦寺焼討ち、長島一向一揆討伐に次いで討伐の対象とされた。三好三人衆・石山本願寺の野田・福島合戦に雑賀衆がその鉄砲集団で大活躍して以来、いつの日にかの討伐が予定された。

天正五（一五七七）年の春に織田信長勢一〇万が雑賀に攻め入って惣国を崩壊させた。しかし、雑賀惣国五組を分裂させ、杜家郷・中郷・南郷、根来・雑賀衆を壊滅させるのは天正一三（一五八五）年三月の秀吉勢による太田城の水攻め、根来寺・粉河寺焼討ち、高野山降伏によってであった。信長の侵攻の時に中村一氏は梶尾吉晴と共に力戦した。信長勢の紀州攻めが中途半端となった後に佐野（泉

佐野市）に要害を構えて織田信張・杉之坊を定番とした時に中村一氏は岸和田で紀州勢を抑止する任につくことになる。

中村一氏が信長の命令による秀吉の中国地方への再々の出陣、山崎の合戦・賤ヶ岳合戦を経て、岸和田城主となつて紀州勢の抑止、撃退に奮戦するのは天正十一

（一五八三）年二月からである。秀吉が和泉の国人衆を大坂城に招集して一氏の岸和田入城を納得させ、和泉の寺社領を没収して与えられたが、知行も兵力も十分でなかったため、その地域の「指出検地」を行つて知行を「三万石」として宛行い、三〇〇〇余の兵力に地侍たちを一氏勢に加えて五〇〇〇人足らずの兵力編成を行つて岸和田城主中村一氏が紀州一揆勢三万余と対戦することになる。この

中村一氏の岸和田城主への「出世」とその知行確保と家臣団編成の過程が横田村詮が周辺の三好氏の残党と共に家臣として採用されること、紀州勢との小勢での対戦で危機に陥つた時に、「蛸地蔵と幾千の蛸」による救済の「蛸地蔵伝説」が生まれることで象徴されているのではないか、と思う。

紀州一揆勢は岸和田城に對して五〇町ほどの距離に中村・沢・田中・積善寺・千石堀の五か所に付城を築いて、根来の杉坊・赤井坊・粉河の御池坊と雑賀衆が中心となり、一氏側に加担しなかつた地侍たちを加えて天正十一年十一月、天正十二年一月に襲来した。秀吉が小牧・長久手に出陣して大坂を留守にした三月に、徳川家康・織田信雄の呼びかけに応じた長宗我部元親勢が根来・雑賀衆に加勢し

て大坂城を脅かす目的で総勢三万で、岸和田城に籠城する中村一氏勢五〇〇〇を包囲する「岸和田合戦」が行われ、一氏勢が大坂よりの蜂須賀正勝・黒田官兵衛の救援を得て戦う。危機に陥り「蛸地蔵尊」に救済されて勝利し、天性寺の日本一の地蔵堂と「蛸地蔵尊縁起」が生まれる。このように中村一氏が守備した岸和田から堺の地域が三好氏から織田氏・豊臣氏への「天下の権

が移行する要地であり、小牧・長久手の合戦での秀吉と家康の争覇戦の時には土佐の長宗我部勢と紀伊の根来衆・雑賀衆が合体して紀伊水道を北上して大坂を攻略せんとした。徳川家康と長宗我部元親の「遠交近政策」が展開されたのである。

貝塚御坊と中村一氏

中村一氏が岸和田城主と

して秀吉の信認を受けて大坂の防禦のために奮戦する。その時に一氏が石山から鷲森、貝塚に移動した顕如上人・一向宗勢と交流して、忙中閑の余裕の時を持つ。このことが『石山本願寺寺日記・宇野主水日記』に収録される。顕如上人の天正八年四月より十一年六月までの鷲森在住、そして七月四日に貝塚に移住してから十三年四月の秀吉の紀州平定までの事実を克明に記録するのが顕如の祐筆であつた宇野主水である。この七月四日の顕如の貝塚への移住と同時に「岸和田中村孫平次へモ内匠登り掛二御案内トシテ罷越シ頼廉ヨリ折紙遣シ候」と記録される。

七月十六日には「岸和田中村孫平次御礼ニ参り御門主（顕如光佐）、新門主（光寿）、興門主（佐超）ニ御見参、申次刑部卿、御相伴主水、

刑部卿御両人、一献夕飯（湯漬）ナリ。孫平次与力河毛源次郎、依藤次郎左衛門両人御トヨリへ召シテ御盃下サル。孫平次ヨリ御三所へ、銘々一腰・馬代御進上、御門主へハ一腰・馬代共ニシ種大樽三荷。此方心分ハ御座敷ニ於テ御門主様ヨリ太刀・銀十枚、新門様ヨリ越後十端、コレハ翌日城へ送ラルル也」とされる。これ以降も岸和田城の中村一氏は貝塚御坊の顕如上人らと再々に交流する。一氏が紀州勢三万余の襲来に応戦する時期の十一年十一月には

「岸和田中村孫平次へ歳暮小袖ニ綿五十把、河毛、佐藤へ綿十把ツツ」、天正十二年正月十六日に「中村孫平次年頭礼参、御門跡様御対面、御太刀一腰、馬一疋、刑部卿申次、主水御相伴、御看三献ニテ御酒参ル。上様へ御祝儀トシテ進物コレ有ル御時新門様へ参ラレ一腰・一疋、興門様へモ同断、河毛、依藤百足ツツ進上、御礼ヲ申ス也、御門跡ニテハ御看二献ナリ」とのよう



「地藏尊縁起」の石碑



岸和田合戦を見た久米田寺多宝塔



久米田寺大師堂

に記録される。中村一氏が紀州勢三万と五千そこそこの兵力で対戦していた時期にもこのような忙中閑の時があつたのである。